國學院大學学術情報リポジトリ

〔研究ノート〕東京都内の大学における「FDハンドブック」の傾向分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小濱, 歩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002118

研究ノート

東京都内の大学における「FDハンドブック」の傾向分析

小濱　歩

【要　旨】

國學院大學では平成17年度に『FDハンドブック』を作成し、同26年度には現行の改訂版ハンドブックを刊行した。29年度現在は刊行形態や執筆項目の再検討を行いつつ、新改訂版の作成に向けた調査を行っている。本稿では、その一環として、収集した東京都内大学の「FDハンドブック」12例と本学の現行版ハンドブックを対象に、その全体的な傾向分析を行った。執筆項目ごとの配分頁数をもとに各ハンドブックが重点的に取り扱っている事項を析出した上で、編集スタイル（解説主体型・事例主体型）と執筆項目の選択（バランス型・テーマ特化型）の視点に基づく４タイプに分類し、それぞれの特徴を通覧した。その上で、「FDハンドブック」作成に際しては、いかなる情報を盛り込むかという内容面での課題もさることながら、どのような刊行形態・編集スタイルを選択するかという形態面での検討が重要であり、そのためにハンドブックの具体的な「活用イメージ」をあらかじめ明確化することが必要であるとの指摘を行った。

【キーワード】

FDハンドブック、東京都内の大学、傾向分析、刊行形態、活用イメージ

１．本稿のねらい

國學院大學では、平成17年度にFDハンドブック編集委員会が主体となって最初の『FDハンドブック』を作成した。平成23年度には教育開発推進機構のもとで改訂を行い、平成26年４月に機構教員が中心となって執筆した『教員力ステップアップ講座』を刊行した。以後３年を経て、機構では、本学の教学面での諸々の変更を加味した新たな改訂版の作成を計画している。本稿では、その内容･刊行形態等の検討に先立つ調査研究の一環として、東京都内の大学における「FDハンドブック」の傾向分析を行う。

如上の目的のため、本稿で扱う「FDハンドブック」は、「教員個人の教育力向上、および学部・学科単位でのFD活動を支援する目的で、学部学科・大学附置機関もしくは学内委員会において作成された、教授法・授業運営の手法・授業改善の方法について冊子体でとりまとめた資料」に限定し、たとえば教務課等で作成された「シラバス作成要領」「成績評価方法」等の実施要領類、あるいは初任者向けの研修等で配布するような、学内の制度・手続き等に関する案内資料等は除外する。

２．調査方針

東京都内に本部を有する私立大学・国公立大学を対象としてウェブサイトを精査し、Web上で「FDハンドブック」の公開を行っている場合は分析対象に含めた。公開されていない大学については、ハンドブック作成の有無について直接電話・メールで問い合わせ

表１　調査結果

	作成している	作成していない	回答なし・不明	計
私立大学	16	43	11	70校
国公立大学	2	2	1	5校
計	18校（24%）	45校（60%）	12校（16%）	75校

を行った。ただし、本学の「FDハンドブック」改訂に資することを目的とする調査のため、人文・教育・情報・社会科学系の学部を有する大学を対象とし、医薬・工学・服飾・神学・芸術・看護福祉系の単科大学は除外した。調査対象とした大学は75校、結果は**表１**の通りである。問い合わせに回答がなかった場合、担当部署不明等の理由で明確な回答が得られなかった場合は、「回答なし・不明」にカウントした。

作成を確認した18校中、Web上から取得したものも含めて、15校からサンプルを提供していただいた。その中から、教務事項をまとめたガイドブックや、大学内のFD関連事業等の資料集として作成されたもの（授業方法や授業改善に関する具体的な解説や事例紹介をほとんど含まないもの）を除き、12校（私立11校・国公立１校）のハンドブックを、本稿における分析の対象とした。また、比較の対象として本学の現行版ハンドブックも加えている（**表２**）。なお、ほとんどのサンプルはあくまで本学の「FDハンドブック」改訂のための検討材料として取り扱う限りにおいて活用許可をいただいたものであるため、

表２　「FDハンドブック」作成状況

大学	学部数	学生数（学部）	総頁数	刊行主体	刊行形態	刊行年月（最新版）	改訂
私立Ａ	10	17,934	45	委員会・ワーキンググループ	ハンドブック	2017.3	毎年度
私立Ｂ	5	6,780	36	委員会・ワーキンググループ	事例集	2014.3	不明
私立Ｃ	4	5,842	32	センター・機構等	ハンドブック	2017.1	毎年度
私立Ｄ	7	15,358	123	委員会・ワーキンググループ	ハンドブック	2014.12	不定期
私立Ｅ	10	18,990	121	委員会・ワーキンググループ	ハンドブック	2017.3	不定期
私立Ｆ	8	6,590	63	委員会・ワーキンググループ	事例集	2017.3	不明
私立Ｇ	18	30,510	75	センター・機構等	ハンドブック	2011.12	不定期
私立Ｈ	17	67,933	59	センター・機構等	ハンドブック	2017.4	不定期
私立Ｉ	15	29,494	84	センター・機構等	ハンドブック	2007.3	不定期
私立Ｊ	10	31,004	47	センター・機構等	事例集	2017.1	毎年度
私立Ｋ	10	19,521	12	センター・機構等	ハンドブック	2006.3	不明
国公立Ａ	4	6,910	16	委員会・ワーキンググループ	ハンドブック	2015.12	不定期
國學院	5	10,389	87	センター・機構等	ハンドブック	2014.4	不定期

本稿では直接大学名を明示することは避け、全体的な傾向分析を行うにとどめたことをお断りしておく。

３．調査結果

３－１．作成状況

規模別に見た場合、学生数5,000～7,000名が４校、10,000名以上が９校で（2017年現在）、主として中・大規模校で作成されている。総頁数・刊行主体はまちまちだが、刊行形態は授業方法・授業改善・FD活動についての体系的な解説を主体とするガイドブックと、教員へのインタビューや授業の紹介をまとめた事例集とに大別される。全ての大学において詳細な出版経緯･改訂方針を聴取することはできなかったが、毎年度情報を更新して刊行･配布するケース（予定含む）と、改訂を行ってはいるが、そのペースは不定期であるケースとに分かれた。なお、「不明」とあるものは単体の刊行物や、FD関連事業の報告書（具体的な事例紹介を主体とするもの）として発行されているため、改訂の予定が不明なものである。

３－２．執筆項目

続いて、提供されたサンプルの検討に基づき、「FDハンドブック」が取り扱う事項を以下13件の執筆項目に分類する。これらの各項目に即して、各大学のハンドブックの傾向を把握したい。

（１）授業設計　主として、シラバスについての解説と具体的作成方法（大学におけるシラバスの項目・テンプレート・記載方針等）。また、カリキュラム全体の中での授業の位置づけや、受講者の特性を理解することの重要性等を解説する、授業設計全般に関する記事も含む。

（２）授業実践　初回授業時の心構えや伝達事項、教材の選択・作成・活用、授業方法や授業形態の種別、授業運営（教室運営）、学生とのインタラクション・質問等への対応、講義･演習を行う際の基礎的な心得や、ティップスについての解説等。「FDハンドブック」の中心を成す項目である。

（３）事例紹介　事例集形式のハンドブックは本項目が中心を成すが、ハンドブック形式でも、少なからぬ頁数を割いて、授業の紹介や教員へのインタビューをケーススタディとして提供している場合がある。

（４）成績評価　試験の実施方法、成績評価方法等。ルーブリック評価についての解説や、そのテンプレート・サンプルを掲載するケースもある。

（５）授業改善　（３）の事例紹介で教員個々人の改善の取組みを紹介するケースもあるが、本項目はそれ以外に、授業実践の省察と改善の方法について解説した記事を念頭においている。主として授業評価アンケートの実施方法・活用についての記述が多くを占める。

（６）サービス等　教育活動を支援するサービスやツールの紹介等。具体的には、TA（ティーチング・アシスタント）、SA（スチューデント・アシスタント）、ICTツールの提供、教学に係るオンラインシステムの説明など。
（７）学生支援　学生への対応の仕方、障がいを有する学生への対応・支援のあり方、ハラスメントに関する説明と防止策、留学生への対応・支援のあり方等。
（８）基礎知識　単位制度、カリキュラムの特徴、GPA制度やCAP制度等、教員が所属大学において授業を実施する上で必須となる、高等教育関連の知識に関する基礎的解説。
（９）制度・設備　休講の届け出方法や担当事務局の連絡先、図書館・LL教室・教室ごとのプロジェクタ等の設置状況など、教育活動上利用する学内諸手続・制度・設備に関する解説。
（10）FD活動等　大学が行っているFDに関する取組み･事業･研修等に関する説明･案内。
（11）危機管理　災害時の対応等、危機管理に関わる記述。
（12）用語・文献　高等教育政策やFD活動に関する用語・概念の解説、参考文献の紹介。
（13）ミッション等　大学のミッション･教育方針に係る憲章､ポリシー等についての記述。

３－３．傾向分析

３－３－1．執筆項目ごとの分量と分類基準の設定

３－２で提示した執筆項目に即して、各大学の「FDハンドブック」がそれぞれどの程度の分量を割いているかを、総頁数に対する該当頁数の割合（％）で示したものが表３－１・３－２である（「その他」は資料以外の写真・挿絵等）。これに基づいて13校のハンドブックのタイプ分けを行う。

タイプ分けに際しては、編集スタイルと執筆項目の選択のしかたという２つの観点から検討を行う。

まず編集スタイルについては、解説主体型と事例主体型を両極とみなすことができる。解説主体型は、授業方法・授業改善・FD活動等に関する体系的説明を行う、ガイドブックやマニュアルとしての性格が強いスタイルであり、３－２の執筆項目で言えば授業設計や成績評価等、全学的な統一基準を有する事柄を対象とする記述と親和性が高い。また、授業実践に関する記述では、教授法に関するティップスや授業運営に際して心がけるべき基礎的な事項を提示する傾向が強い。特に授業実践に関する経験の浅い新任教員を対象とするガイドブックとしての活用方法を想定することができる。

これに対して事例主体型は、講義・演習等の取組み事例や、担当教員へのインタビューを主体とするスタイルである。このスタイルは、授業方法や授業改善に対してある特定のモデルや方法論を提示するよりも、多様な授業実践の存在を前提とした上で、ピックアップした様々な事例をケーススタディとして提供することに重点を置いていると言えよう。教員が自身の担当分野や授業形態を念頭に置きつつ参照し、必要に応じて取り入れる活用方法を想定していると言える。従って、ある程度授業経験を積んだ教員がスキルアップの

表３－１　執筆項目ごとの分量（%）①

	授業設計	授業実践	事例紹介	成績評価	授業改善	サービス等	学生支援
私立Ａ	6.7	40.0	0.0	2.2	4.4	2.2	0.0
私立Ｂ	0.0	0.0	100	0.0	0.0	0.0	0.0
私立Ｃ	28.1	21.9	0.0	0.0	6.3	3.1	0.0
私立Ｄ	4.9	1.6	42.3	6.5	9.8	4.1	11.4
私立Ｅ	1.7	1.7	25.6	2.5	0.0	5.0	38.8
私立Ｆ	0.0	0.0	68.3	0.0	0.0	0.0	0.0
私立Ｇ	4.0	18.7	26.7	1.3	2.7	2.7	20.0
私立Ｈ	6.8	25.4	6.8	5.1	6.8	0.0	3.4
私立Ｉ	4.8	14.3	52.4	2.4	2.4	2.4	4.8
私立Ｊ	0.0	0.0	100	0.0	0.0	0.0	0.0
私立Ｋ	0.0	100	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
国公立Ａ	0.0	25.0	56.3	0.0	0.0	0.0	0.0
國學院	8.0	36.8	0.0	10.3	4.6	4.6	8.0

表３－２　執筆項目ごとの分量（%）②

	基礎知識	制度・設備	FD活動等	危機管理	用語・文献	ミッション等	その他
私立Ａ	8.9	24.4	4.4	0.0	0.0	4.4	2.2
私立Ｂ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
私立Ｃ	6.3	0.0	9.4	0.0	9.4	9.4	6.3
私立Ｄ	0.0	3.3	3.3	0.0	1.6	0.0	11.4
私立Ｅ	6.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	17.4
私立Ｆ	0.0	0.0	22.2	0.0	0.0	0.0	9.5
私立Ｇ	2.7	1.3	1.3	0.0	12.0	0.0	6.7
私立Ｈ	10.2	0.0	11.9	0.0	0.0	20.3	3.4
私立Ｉ	2.4	0.0	4.8	0.0	1.2	0.0	8.3
私立Ｊ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
私立Ｋ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
国公立Ａ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.8

ために、あるいは新たな教育実践のヒントを得るために用いるのに比較的適しており、授業実践に重点を置く、あるいは特化するタイプのハンドブックに多い形態と言えよう。

一方、執筆項目の選択という面から見ると、執筆項目全般にわたって一定量の記述を行うバランス型と、特定テーマに特化、もしくは重点を置くテーマ特化型を両極とすることが見て取れる。バランス型は、「FDハンドブック」の性格上、授業実践・事例紹介・学生支援の項目に頁数が多く配分される一方、サービス等・基礎知識・大学のミッションや用語集等をも含めた、全体的・網羅的な記述を目指している。必要なときに折に触れて参

照できる、文字通りのハンドブックとしての活用方法を念頭に置いて作成されていると言える。

これに対してテーマ特化型は、より限定された目的のために作成されており、たとえば授業評価アンケートの分析に基づく授業改善の提言集、学生の私語に対する有効な対応方針の検討結果、アクティブ・ラーニング形式の授業運営の実践事例の収集等を取りまとめた例がこれにあたる。「FDハンドブック」として冊子化され、学内で配布される場合も、如上の課題に対して、FD委員会・ワーキンググループ・FDセンター等が一定期間取り組んだ成果を集成した報告書としての性格を併せ持っていると言える。

３－３－２．４象限図によるタイプ分けとその特徴

以上の観点に基づき４象限図を作成し、13校のハンドブックを分類すると図１の通りとなる。

（１）タイプＡ

タイプＡは、執筆項目を広くカバーするバランス型を採りつつ、その中で特に事例紹介に多くの頁を割り当てる点に特色を有しており、13校の中では私立Ｄ・Ｅ・Ｉが相当する。

まず、私立Ｄは冒頭で大学のFD活動全般に関する記述を行った上で、全体を「基本編」と「実践編」に二分し、前者で執筆項目をかなり広くカバーした解説を行っている。一方、後者は全24件から成る事例集となっており、他の執筆項目に対して42.3％とかなり多くの分量を割いている。各学部学科から２～３名の教員が、１人あたり２～３頁で取り組み紹介を行う内容である。

私立Ｅは学生支援に対する解説が全体の38.8％と、突出して詳細かつ手厚くなっており、これは平成28年４月の「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」の施行を契機として、障がいを有する学生への合理的配慮を求める社会的要請に応えることを念頭に置いた改訂を行ったことによる。この項目以外では、授業設計・授業実践・成績評価等についてそれぞれ解説されているが、特に一章を割いて授業の実践事例６件を紹介しており、その割合が他の執筆項目に対して25.6％と大きくなっていることから、比較的事例紹介に重点を置いたものと見てタイプＡに分類した。なお、６件の内３件がアクティブ・ラーニングの実践事例、残り３件はそれぞれシラバスと成績評価・オンライン学修支援システムの活用・ルーブリックの活用となっている。

私立Ｉもバランス型に属しているが、前半では主として解説的記述がなされる一方、後半の事例紹介が52.4％と過半を占めることから、タイプＡに分類した。26件の事例が、ゼミ・大教室・講義・語学・フィールドワーク・実技科目・授業外の対応・留学生の８種別に分類されている。事例集としても授業形態や分野を広くカバーした網羅的な体裁となっている点が特色であり、前半の授業実践に関する解説が基礎的な事項を簡潔に押さえたものとなっている一方、網羅的な事例紹介をコンテンツに加えることで、初任者から一定の教育歴を有する教員まで、広くかつ柔軟に活用できるハンドブックを目指す意図が見てとれる。

（２）タイプＢ

タイプＢは執筆項目の選択においてバランス型、編集スタイルとしては解説主体型を併せたもので、13校の中で最多の５校がこのタイプを採用しており、「FDハンドブック」としてはオーソドックスなタイプと考えられる（本学のFDハンドブックもこのタイプに属する）。いずれも執筆項目の大半を網羅的に取り上げて解説しているが、授業実践や授業設計の部分に比較的重点を置きつつ、他の項目についても一定の分量を割いており、全体的にバランス重視の構成と言える。なお、私立Ｇは高等教育・FD関連の用語集と文献紹介に12.0%を、私立Ｃは9.4%を割いており、その他のハンドブックが０～1.2%となっているのに対して注目すべき特色となっている。

バランス型

	【タイプB】 私立A・C・G・H (＋國學院大學)	【タイプA】 私立D・E・I
解説主体型	【タイプC】 私立K	【タイプD】 私立B・F・J 国公立A

事例主体型

テーマ特化型

図１　「FDハンドブック」の４タイプ

また、このタイプに特徴的なこととして、私立Ａ・Ｃ・Ｈが大学のミッションと教育方針・ポリシー等に関する章を特に設けていることも指摘したい。殊に私立Ｈは全体の20.3%を充当しており、全学的な教育力向上に向けて、大学のミッション・ポリシーの共有の必要性を強く意識していることを窺わせる。

私立Ａは授業実践に40.0%、制度・設備に24.4%を充てており、この両者に重点を置いた構成となっているが、特に授業実践については、大学で実施している授業評価アンケートの設問項目と、教育方法・教育改善に関わる各トピックとを対応させて記述する方針をとっている点がユニークである。授業評価アンケートを授業実践の省察と改善に積極的に結びつけ、活用することを促す興味深い試みとして注目される。

（３）タイプＣ

執筆項目の選択に際しては特定テーマに特化集中し、かつ解説主体型の編集スタイルを取るタイプである。私立Ｋは12頁の小冊子であるが、テーマとしては授業運営の改善に特化しており、学生の授業参加の促し、コミュニケーションの活性化、授業外学修の促進、教室管理等について６つのトピックを設定し、それぞれについて、大学の授業評価アンケートの分析結果に基づく改善案の提言を行っている。授業評価アンケートの教育改善への活用事例として興味深い内容となっている。なお、この小冊子は、高等教育やFDに関連する様々なテーマを取り扱ったブックレットシリーズの１冊として刊行されており、その意味ではテーマ特化型を意識的に選択して作成された事例と言える。

（４）タイプＤ

執筆項目の選択に際しては特定テーマに特化集中し、編集スタイルとしては事例主体型を取るタイプである。事例集の形式で発行されており、また、学内におけるFDプロジェ

クトや文部科学省のAP事業等で推進したFD関連事業の報告書的性格を併せ持っている点が特色と言える。たとえば私立Ｂは学内のワーキンググループによる調査の成果として作成された、教室運営における学生の私語の抑制方策に特化した事例集となっており、私立Ｆ・Ｊはアクティブ・ラーニングの活性化による教育力向上をテーマとして、様々なタイプの実践事例を集成している。それぞれのテーマに関する限り、教員が「FDハンドブック」としても活用できる形態である。

なお、13校中、唯一国公立大学の事例として取り上げた国公立Ａのハンドブックは、能動的学修の促しをテーマとして作成されており、手法編として総論を解説した後、テーマの参考となる事例７件を各学部の共通科目･専門科目からピックアップし、紹介している。また、2017年に、アクティブ・ラーニングの評価手法をテーマとする続編が、同様の形式で作成されている。

４．総括と課題

以上、各大学の「FDハンドブック」を４タイプに分類し、その特徴を概観したが、無論、望ましい「FDハンドブック」のありようについて検討して行くのであれば、それぞれのハンドブックを対象として、執筆項目ごとのより詳細な傾向把握や、記述内容の質的分析を行ってゆく必要があろう。その意味で、本稿の分析は極めて表層的なレベルに留まる一試論に過ぎない。しかし、タイプ分けの過程と、各タイプに属するハンドブックの特徴を通覧することを通して、ひとつの問題意識を示すことは可能だと思われる。

本稿冒頭において、筆者は「FDハンドブック」を「教員個人の教育力向上、および学部・学科単位でのFD活動を支援する目的で、学部学科・大学附置機関もしくは学内委員会において作成された、教授法・授業運営の手法・授業改善の方法について冊子体でとりまとめた資料」と定義した。しかし、このような視点に立った場合、「FDハンドブック」の作成を進めるに際しては、FD活動を促進・活性化するために、いかなる情報を選択し、取りまとめて提供するかという、コンテンツ面の課題に視野が限定されてしまう嫌いがある。

そこで、本稿の傾向分析では、各大学の「FDハンドブック」を、編集スタイルや執筆項目の選択方針を基準として、解説主体型／事例主体型・バランス型／テーマ特化型という軸を用いつつ４タイプに分類した。言わば形態的な面に注目して分析を行ったわけである。その結果、タイプごとの特徴の違いをある程度浮かび上がらせることができたが、これらの特徴は、「FDハンドブック」を、どのような局面で、どういう教員を対象として、いかなる使い方を想定して作成するかという問題、すなわち想定される「活用イメージ」をどのように定めるかという問題と密接に関わって来ると考えられる。この視点は、「FDハンドブック」の作成・改善を行うに際して多分に示唆的であると言えよう。

たとえば、「FDハンドブック」を、新任教員を対象とする研修用の資料として作成す

る場合、編集スタイルとしては事例集よりも、基礎的な事項を体系的かつ網羅的に解説した解説主体型かつバランス型（タイプＢ）の作成方針を取ることが望ましいと考えることができる。その上で、大学の方針によっては、ミッション・教育理念の執筆項目に多くの分量を割くか、学内制度・手続き面の記述を強化してマニュアルとしての利便性を高めるか、あるいは高等教育政策やFDに関する基礎知識の紹介に重点を置くか等、編纂側の活用イメージに即して様々な選択肢が存在し得る。

一方で、中堅・ベテランの教員にとっても有益な視点を提供できる内容を盛り込みたいと考える場合は、たとえばアクティブ・ラーニングや反転授業等、特に注目される取り組みに即したテーマ特化型のハンドブック、あるいは、先進的かつ実践的な事例の紹介に重点を置く事例主体型のハンドブック（タイプＤ）を作成するという方向性が考えられよう。

また、より汎用性を高めたいと考える場合は、前半で基本的にバランス型・解説主体型の網羅的記述を行いつつ、後半では事例主体型の編集スタイルを取り入れて、多様な分野・授業形態の実践事例を紹介することで、様々な教員の異なる関心・要請に応え得るハンドブックを目指す選択もあり得る（タイプＡ・私立Ｉのハンドブックはこのタイプと見なすことができよう）。

以上の如く、「FDハンドブック」の作成に際しては、どのような情報を盛り込むかという内容面の検討だけでなく、どのような編集スタイルを選択するかという形態面の検討を重視する必要がある。

本学では現行版「FDハンドブック」の改訂を進めているが、より望ましい形へと進化させてゆくためには、目的・用途・対象等を考慮した「活用イメージ」を具体的に定め、編纂チーム内で共有した上で、その実現に向けて、どのような刊行形態・編集スタイル・執筆項目を選択すべきか、慎重に検討を進めて行く必要があろう。

【謝辞】

本稿の執筆に際しては、当方からの問い合わせに対して都内の諸大学よりお送りいただいた「FDハンドブック」類を多数参照させていただいた。これらの冊子類の大半は、あくまで、本学教育開発センター内部で「FDハンドブック」の改訂方針を検討するに際しての参考資料・検討材料として利用を許可いただいたものであることに鑑み、ここに大学名・冊子名をリストアップして掲げることは控えるが、問い合わせに対応してくださった大学、また冊子類を提供してくださった大学に対して、この場を借りて深く感謝申し上げる次第である。